

鹿児島県離島振興協会「アイランドキャンパス」事業 2016

ワークショップ 奄美の魅力発見・発信
～地元高校生の誇りと首都圏大学生の驚きを組み合わせ
新しい時代の観光振興策を提言～

報告書

実施期間：2016年11月21日（月）～11月23日（水）

千葉商科大学 国際教養学部

目次

1. 実施主体.....	4
1.1 千葉商科大学 国際教養学部.....	4
1.1.1 諸元.....	4
1.1.2 特徴.....	4
1.1.3 これまでの離島における取組実績.....	4
2. 申請内容.....	5
2.1 実施期間.....	5
2.2 選択したテーマ.....	5
2.3 目的.....	5
2.4 方法.....	5
2.5 期待される効果.....	6
3. 実施状況.....	7
3.1 参加者・指導者・協力者等.....	7
3.2 実施場所・内容.....	8
3.3 実施の流れ.....	8
4. 事前研修.....	10
4.1 事前研修.....	11
4.2 特別講義.....	11
5. 奄美大島における研修.....	12
5.1 ワークショップ.....	14
5.1.1 実施概要.....	14
5.1.2 ワークショップテーマ一覧.....	15
5.2 観光振興シンポジウム（ワークショップ発表会）.....	16
5.2.1 実施概要.....	16
5.2.2 次第.....	16
5.2.3 来賓者.....	16
5.2.4 発表テーマ一覧.....	17
5.2.5 表彰内容.....	18
5.3 報道事例.....	19
5.3.1 KTS 鹿児島テレビ.....	19
5.3.2 奄美新聞.....	19
5.3.3 南海日日新聞.....	19
6. 事後研修.....	20
6.1 ポスターセッション.....	20
6.2 表彰内容.....	21
7. 評価.....	22
7.1 観光振興シンポジウム来賓者による評価.....	22
7.1.1 発表に対する講評.....	22
7.1.2 考察.....	23
7.2 鹿児島県立大島北高等学校 高校生による評価.....	24
7.2.1 特別講義の感想.....	24
7.2.2 考察.....	25
7.3 鹿児島県立大島北高等学校 教員による評価.....	26
7.3.1 振り返りコメント.....	26
7.3.2 考察.....	26

7.4 千葉商科大学国際教養学部 学生による取り組みを通じた評価.....	27
7.4.1 研修まとめレポート.....	27
7.4.2 学生による取り組みの総評と考察.....	34
7.5 千葉商科大学国際教養学部 教職員による評価.....	35
7.5.1 全般を通じた振り返りコメント.....	35
8.資料.....	37
8.1 研修中の写真.....	37
8.2 研修のしおり.....	40
8.3 観光振興シンポジウム告知ポスター.....	41
8.4 発表スライド抜粋.....	42
8.5 ポスター作品抜粋.....	43
8.6 新聞報道例.....	44
8.7 本取り組みの外部発信.....	45

1. 実施主体

1.1 千葉商科大学 国際教養学部

1.1.1 諸元

- 千葉商科大学 国際教養学部
- 住所 千葉縣市川市国府台1-3-1

- 学生数(入学定員) 75名
- 専任教員数 12名
- 開設 2015年4月

1.1.2 特徴

千葉商科大学(Chiba University of Commerce, CUC) 国際教養学部は、世界を舞台に活躍し、時代を拓く真のグローバル人材をつくるミッションのもと、これまでの高等教育にはなかった斬新な教育プログラムを開発し実施している。文部科学省への届出に基づき、2015年の開設をして以降、徹底的なアクティブ・ラーニングに取り組んでいる。

入学式の直後にその足で海外に飛び、3泊4日程度の海外研修を行っている。2015年度は上海、2016年度はベトナムで実施した。現地の大学生との交流を核に、異文化体験及び外から日本を見てモチベーションを高めたところから学修を開始、2年次には必修の海外短期留学を義務付けている。留学やサマープログラムへの受け入れ等がしやすいよう、クォーター制を導入、実践的なカリキュラムでは、「日本を知る⇒周辺(アジア、中国)を知る⇒世界へと飛躍する」という段階的な教養の蓄積をはかっている。このうち、日本を知る、というテーマの一環として奄美でのフィールドワークを位置づけている。

卒業後には「世界で働く・世界と働く・世界をもてなす」をキャッチフレーズにしたキャリアに就いて国際社会に貢献できるような人材を輩出することとしている。

1.1.3 これまでの離島における取組実績

実施名称：フィールドワーク in 奄美

実施場所：奄美大島

実施期間：2015年6月26日(金)～28日(日)

参加人数：教員5名、職員3名、学生57名

千葉商科大学 国際教養学部は、入学初年度の全員必修の授業として「国内短期研修」を開講している。これは、奄美大島に赴いて「日本を知る」内容でのフィールドワークをすることを中心に、事前の大学内での講義、事後の大学内でのポスターセッション、レポート課題提出などを通じて学びを深めるものである。2015年度には、この「国内短期研修」の枠組みにおいて「フィールドワーク in 奄美」を実施し、学部1年生57名が、奄美の自然・歴史・文化・産業などを自ら実際に体験、参加をすることを通じて学んだ。

2. 申請内容

2.1 実施期間

2016年11月21日(月)～11月23日(水)

2.2 選択したテーマ

「交流人口の拡大を図るための観光振興の方策について」

2.3 目的

グローバル化が急速に進展する世界にあって、地域社会のアイデンティティが改めて問われている。テロや経済格差、地球環境問題等、国際社会が抱える様々な問題を理解、解決するにあたって「日本とは？ 日本人とは？」というアイデンティティを抜きには語れない時代に突入しているのである。

奄美は地政学的にも歴史的にも琉球と薩摩の狭間に位置し、ウチナンチュでもヤマトンチュでもない独自のシマンチュ文化を紡いできた。さらに群島を構成する有人8島の文化的ディバーシティにも特筆すべきものがある。しかしながら、地元住民はこの宝ともいえる特性に気付いていない上、本土風の開発の波に洗われ、貴重な地域文化がハード・ソフト両面で喪失の危機に瀕している。何を守り、何は時代に合わせて変革していくべきなのか。世界遺産への申請を控えた今、奄美を世界に向けて情報発信するためにも、まず、地域文化の貴重な特性を知る必要がある。

一方、千葉商科大学 国際教養学部は、真のグローバル人材育成をミッションとして掲げている。世界に通用する本物の教養人は、表面的なカンパセーションではなく、相互理解に基づいた本質的なコミュニケーションができなければならない。そのためにはまず、自分自身の価値軸を明確にする必要があり、より具体的には、日本を知り、日本人とは何かを語れなければならない。奄美群島から見る日本や世界は首都圏から見るそれと様相を異にする。

そこで、卒業に必要な必修の単位として、奄美におけるフィールドワークを設置した。この講座を通じて、学生が自らのアイデンティティに深く思いを致すことを目的とする。

2.4 方法

鹿児島県立大島北高等学校では一昨年より、奄美博物館の中山清美元館長の指導のもと、奄美の貴重な文化として何を守るべきか、古老の聞き取りを始めとした調査を行っている。このプロジェクトとの連携によるワークショップを行う。地元の高校生たちが「大切に守るべき」文化と考えているものと、千葉商科大学 国際教養学部の学生たちが初めて触れて感動した奄美の独特な文化を突合し、内側からみた文化資源と外からみた魅力を比較考量することによって、今後の観光振興に有益な提言を行う。

ワークショップには、聴衆として奄美の観光協会や商工会、紬組合等々の代表者に参加を要請し、提言を受け止め実現化する実践的な機会とする。

2.5 期待される効果

島の高校生たちに自らの文化に対する自覚と誇りを持たせ、プレゼンテーション等の学習効果をもたらすと同時に、訪れる大学生の学修の上では、異文化に対する新鮮な感動から「この国のかたち」についての新たな認識を形成し、世界の中の日本についてのアイデンティティを築く効果が期待できる。

島の産業にとっては、若い層に響く観光プログラムを開発するヒントを得る機会となる。

3. 実施状況

3.1 参加者・指導者・協力者等

千葉商科大学 国際教養学部	大学生	75名 (学部1年生：75名)
	教員	6名 学部長 教授 宮崎 緑 教授 久保 裕也 教授 五反田 克也 教授 鈴木 恒雄 准教授 太田 昌志 准教授 施 敏
	職員	2名 学部事務課 国際教養学部担当 課長 江原 丈智 学部事務課 阪倉 翔
鹿児島県立 大島北 高等学校	高校生	28名 (高校3年生：6名、2年生：5名、1年生：17名)
	教員	3名 校長 飯伏 良広 先生 教頭 樋之口 仁 先生 (聞き書きサークル指導ご担当) 実習助手 飛松 千暁 先生
<ul style="list-style-type: none"> ● 里見海運産業株式会社 (奄美ツーリストサービス) 経営戦略室 顧問 前 鹿児島奄美パーク 次長 奥田 倣造 様 (企画協力・現地調整・同行を通じた協力) ● 鹿児島県奄美パーク 次長 里村 強志 様、奄美パーク職員の皆様 (ワークショップ・シンポジウム開催に関わる協力) ● 各研修訪問先の皆様 (インタビュー取材協力等) 		

3.2 実施場所・内容

	名称	住所	実施内容等
1	千葉商科大学	千葉県市川市 国府台 1-3-1	<u>【大学生】</u> 事前研修 班分け・事前調査・テーマ決定・PowerPoint 作成 事後研修 ポスター作成 ポスターセッション
2	鹿児島県立 大島北高等学校	鹿児島県奄美市 笠利町中金久 356	<u>【高校生】</u> 高校生向け特別講義（事前研修） 事前打ち合わせ
3	奄美リゾート ばしゃ山村	鹿児島県奄美市 笠利町用安 1246-1	<u>【大学生】</u> 11/21-11/23 滞在 島唄・八月踊り鑑賞、参加体験 奄美伝統料理の食事体験 自然体験 ワークショップ準備作業等
4	鹿児島県奄美 パーク	鹿児島県奄美市 笠利町節田 1834	<u>【大学生】</u> 奄美伝統料理の食事体験 田中一村記念美術館鑑賞 奄美の自然、歴史、文化を映像や展示で鑑賞・学習 ワークショップ参画 観光振興シンポジウム参画・発表 <u>【高校生】</u> ワークショップ参画 観光振興シンポジウム参画・発表
5	原ハブ屋奄美	鹿児島県奄美市 笠利町平字土浜 1295-1	<u>【大学生】</u> ハブの生態と奄美の人々との関わりについて学習
6	奄美大島紬村	鹿児島県大島郡 龍郷町赤尾木 1945	<u>【大学生】</u> 大島紬の歴史、製造工程、芸術・文化・産業としての現状について学習 絞り染め体験
7	黒潮の森 マングローブ パーク	鹿児島県奄美市 住用町石原 478 番 地	<u>【大学生】</u> 奄美の自然・生態系について学習 カヌー体験 ワークショップに向けて奄美の地元の方々（従業員）へのヒアリング調査 ワークショップ準備作業等

3.3 実施の流れ

- 2016年6月24日（金）～11月11日（金）：事前研修
 - 4章で詳述する。

- 2016年11月21日(月)～11月23日(水)：奄美大島における研修
 - 5章で詳述する。
- 2016年11月24日(木)～12月12日(日)：事後研修
 - 6章で詳述する。

4. 事前研修

次の日程・場所・内容で事前研修を行った。

2016年6月24日(金)～11月11日(金)

月/日(曜)	地名	内容
6/24(金)	千葉商科 大学	<u>【大学生】</u> 事前講義1：研修概要、奄美について (担当：五反田・宮崎)
7/15(金)	千葉商科 大学	<u>【大学生】</u> 事前講義2：奄美の自然について・2年生ポスター発表(担当：五反田)
10/18(火)	大島北 高等学校	<u>【高校生】</u> 特別講義(事前研修)(担当：宮崎)
11/4(金)	千葉商科 大学	<u>【大学生】</u> 事前講義3：ワークショップ・シンポジウム指導 (担当：五反田)
11/7(月)	千葉商科 大学	<u>【大学生】</u> 研究基礎：ワークショップ・シンポジウム準備 (担当：五反田)
11/11(金)	千葉商科 大学	<u>【大学生】</u> 事前講義4：調査の仕方、奄美文化についての理解 (担当：鈴木・宮崎)
11/14(月)	千葉商科 大学	<u>【大学生】</u> 研究基礎：ワークショップに向けたスライド作成 (担当：五反田)

※各回90分(高校での講義は70分)

4.1 事前研修

千葉商科大学国際教養学部の1年生必修の授業として、「国内短期研修」の枠組みにおける「事前講義1」～「事前講義4」と、週2回に実施される「研究基礎」の一部とを合わせて、事前研修を実施した。

事前講義では、奄美についての基礎知識をスライドで学ぶほか、映像資料なども活用した形での研修とした。研究基礎では、班ごとの活動の立ち上げ、ワークショップに向けたテーマ選定・基礎的調査・スライド作成などを行った。

4.2 特別講義

大島北高等学校では、総合的な学習の時間として「アマン day」という科目を設定し、奄美の歴史、文化、自然についての理解を深める学習を行っている。この学習の一環として、2016年10月18日（火）14:00～15:10に、同校体育館を会場として、全校生徒110名が受講する特別講義を、千葉商科大学国際教養学部長・宮崎緑教授が講師となって実施した。

5. 奄美大島における研修

次の日程・場所・内容で奄美大島における研修を行った。

2016年11月21日(月)～11月23日(水)

月・日(曜)	地名	時間帯	スケジュール			宿泊	食事	
11/21(月)	奄美大島	8:10	成田空港 集合			奄美リゾート ばしゃ山村	朝： - 昼：奄美パーク 夕：ホテル	
		9:40	成田空港 → 奄美空港へ					
		12:30	奄美空港到着 → 奄美パークへ移動					
		13:00	ガイダンス					
		13:15	奄美パークにて昼食(鶏飯)					
				1号車	時間			2号車
		14:00	奄美パーク → 大島袖村へ移動	14:00	奄美パーク、田中一村記念美術館見学			
		14:30	ハンカチ作り、施設見学	14:40	奄美パーク → 原ハブ屋へ移動			
				15:00	ハブのショー見学			
				15:30	原ハブ屋 → 大島袖村へ移動			
				15:45	施設見学、ハンカチ作り			
		16:30	大島袖村 → 原ハブ屋へ移動					
		16:45	ハブのショー見学					
		17:15	原ハブ屋 → 奄美パークへ移動					
		17:30	奄美パーク、田中一村記念美術館見学	17:30	大島袖村 → ホテルへ移動			
				17:45	ホテル到着			
		18:10	奄美パーク → ホテルへ移動					
18:30	ホテル到着							
19:00	ホテルにて夕食 ～ 島唄・八月踊り鑑賞							
20:30	夕食、島唄・八月踊り鑑賞 終了予定							
11/22(火)	奄美大島	7:00	朝食			奄美リゾート ばしゃ山村	朝：ホテル 昼：マング ローブパーク 夕：ホテル	
		8:00	朝食後、自然学修またはワークショップ準備					
		10:00	ホテル → 黒潮の森 マングローブパークへ移動					
		11:15	マングローブパーク到着 ～ ビデオ学修					
				1号車	時間			2号車
		11:30	カヌー体験	11:30	昼食			
				12:15	ワークショップ準備			
		13:00	昼食	13:00	カヌー体験			
		13:45	ワークショップ準備					
		14:45	マングローブパーク → 奄美パークへ移動					
		16:00	大島北高校とのワークショップ					
		18:00	ワークショップ終了後、観光振興シンポジウム(ワークショップ発表会)設営					
18:30	奄美パーク → ホテルへ移動							
19:30	夕食							
21:00	夕食終了予定							
21:15	ワークショップ発表会準備							

月・日(曜)	地名	時間帯	スケジュール	宿泊	食事	
11/23(水)	奄美大島	6:30	朝食		-	朝:ホテル 昼:軽食配付 夕:-
		7:45	ホテル → 奄美パークへ移動			
		8:15	奄美パーク到着、ワークショップ発表会準備			
		9:20	観光振興シンポジウム ワークショップ発表会(※来賓あり)			
		11:15	奄美パーク → 奄美空港へ移動			
		11:30	奄美空港到着 ※昼食は軽食を配付。空港内、機内で摂る			
		13:10	奄美空港			
	成田	15:10	成田空港到着、解散			

5.1 ワークショップ

本実施内容の中核として、2016年11月22日（火）に、鹿児島県立大島北高校の生徒との協同学修に取り組み、ワークショップを実施した。

5.1.1 実施概要

日 時：2016年11月22日（火）16時～18時

場 所：鹿児島県奄美パーク イベント広場

内 容：

1. 事前の班分けに基づいて、3つの班をまとめる形でグループを構成して、グループごとに机を囲む形で着席した（このとき、大学生と高校生とは初顔合わせであった）。
2. グループごとに大学生と高校生が相互に自己紹介を行った。
3. グループごと・それぞれの班ごとに、大学生が事前に準備してきた PowerPoint ファイルをもとにして、奄美のシンボルについての発表内容を提案した。
4. グループごと・それぞれの班ごとに、高校生が地元の観点から発表内容についてコメントや新たな提案をし、議論した。
5. グループごと・それぞれの班ごとに、議論を踏まえて PowerPoint ファイルを更新した。
6. グループごと・それぞれの班ごとに、PowerPoint をどのように更新したのか、班の発表をどのように行うかをアピールした。
7. グループごとに、いずれか1つの班を選抜し、翌日の観光振興シンポジウムでの発表をするための準備に着手した。
8. （選抜された班は、ワークショップ後ホテルに戻ってから、各グループの担当教員を中心に、PowerPoint の作成、プレゼンテーション練習について指導を受けた。その後も深夜まで各班での発表準備に取り組んだ。）

5.1.2 ワークショップテーマ一覧

大学生・高校生混成の班分けを行い、大学生が事前に準備してきた次のテーマについて、班ごとにワークショップを行った。

班	取組テーマ	メンバー構成
1班	バードウォッチング×釣り×カヌー 奄美の大自然を堪能	【大学生】 男子3名女子2名 【高校生】 女子2名
2班	ハートロック	【大学生】 男子3名女子2名 【高校生】 女子2名
3班	シマ唄 奄美大島にシマ唄で旗を立てる	【大学生】 男子3名女子2名 【高校生】 女子2名
4班	奄美とルリカケスの未来 ～絶滅危惧種を脱出～	【大学生】 男子3名女子2名 【高校生】 男子1名女子1名
5班	KEIHAN ～奄美大島と鶏飯の歩み～	【大学生】 男子3名女子2名 【高校生】 女子1名
6班	誇らしやー ハートロックとハブ	【大学生】 男子3名女子2名 【高校生】 男子2名
7班	世界に誇る大島紬	【大学生】 男子3名女子2名 【高校生】 女子2名
8班	広めよう奄美の島口	【大学生】 男子3名女子2名 【高校生】 男子1名女子1名
9班	～ありがっさまりようた～鶏飯	【大学生】 男子3名女子2名 【高校生】 女子2名
10班	画家 田中一村 ～奄美大島が一村を変えた～	【大学生】 男子4名女子2名 【高校生】 男子1名女子1名
11班	危機、奄美のシンボル アマミノクロウサギ	【大学生】 男子3名女子2名 【高校生】 男子1名女子1名
12班	鶏飯で町おこし	【大学生】 男子3名女子2名 【高校生】 女子2名
13班	赤尾木湾 奄美ミステリー ～白馬がおちてきた～	【大学生】 男子3名女子2名 【高校生】 男子2名
14班	ビバ！奄美の宝！文化の継承	【大学生】 男子3名女子2名 【高校生】 女子2名
15班	1300年の歴史を重んずる大島紬	【大学生】 男子3名女子2名 【高校生】 男子1名女子1名

5.2 観光振興シンポジウム（ワークショップ発表会）

本実施内容の中核として、2016年11月23日（水）に、鹿児島県立大島北高校の生徒との協同学修の成果発表会として、観光振興シンポジウム（ワークショップ発表会）を実施した。

5.2.1 実施概要

日 時：2016年11月23日（水）9時20分～11時

場 所：鹿児島県奄美パーク イベント広場

内 容：「奄美のシンボルを探そう・つくろう」をテーマとする観光振興シンポジウムとして、ワークショップ発表会を開催し、奄美市教育委員会、観光協会等の方々に対し、本学学生、大島北高校生徒合同チームによる報告を実施した。また、幕間には大島北高校生による島唄が披露された。さらに、シンポジウムの締めくくりとして、会場内の大学生・高校生・来賓・教職員の皆で六調を踊って終了した。

5.2.2 次第

司 会：国際教養学部 学部長 宮崎 緑 教授

発表者：千葉商科大学 国際教養学部 学生、鹿児島県立大島北高等学校 生徒

- | | |
|---|-------|
| 1. 開会挨拶 | 9:20 |
| 2. 大島北高校生徒・千葉商科大学国際教養学部生 混合チームによる発表
(5班、各班発表約5分) | 9:35 |
| 3. 島唄披露 | 10:05 |
| 4. 表彰 | 10:20 |
| 5. 出席者講評 | 10:30 |
| 6. 閉会挨拶 | 10:40 |

5.2.3 来賓者

- | | | |
|---------------|------|----------|
| ● 奄美市教育委員会 | 教育長 | 要田 憲雄 様 |
| ● あまみ商工会 | 会長 | 奥 篤次 様 |
| ● 奄美大島商工会議所 | 専務理事 | 川口 智範 様 |
| ● 奄美大島観光協会 | 会長代行 | 越間 得晴 様 |
| ● 奄美群島広域事務組合 | | 豊 勇樹 様 |
| ● 奄美群島観光物産協会 | | 松元 英雄 様 |
| ● あまみ大島観光物産連盟 | | 恒吉 美智子 様 |

5.2.4 発表テーマ一覧

ワークショップを経て全15班のうち次の5班が選抜され、観光振興シンポジウム内での発表が行われた。

発表順	班	発表タイトル	メンバー構成	発表概要
1	2班	ハートロック	【大学生】男子3名女子2名 【高校生】女子2名	奄美大島にある「ハートロック」について、世界各地の「ハートロック」と比較しつつ、観光資源としての活用内容を提案した。
2	9班	～ありがっさまりょうた～鶏飯	【大学生】男子3名女子2名 【高校生】女子2名	香川県の讃岐うどん、沖縄県の沖縄そばなどを対照事例とし、奄美の鶏飯をこの地域特有の料理として観光シンボル化することを提案した。
3	13班	赤尾木湾 奄美ミステリー ～白馬がおちてきた～	【大学生】男子3名女子2名 【高校生】男子2名	赤尾木湾が隕石孔であるとする説、白馬伝説などを軸に赤尾木湾を奄美のシンボルとすることを提案し、SNSを通じて自然や伝承などを紹介し観光客招致に繋げるプランを示した。
4	4班	奄美とルリカケスの未来 ～絶滅危惧種を脱出～	【大学生】男子3名女子2名 【高校生】男子1名女子1名	アメリカでハクトウワシが保護により絶滅危惧状態から回復した例を踏まえ、奄美でかつて乱獲されていたルリカケスが今日では個体数が回復しているエピソードを通じて、奄美の自然と人との関わりをアピールすることを提案した。
5	10班	画家 田中一村 ～奄美大島が一村を変えた～	【大学生】男子4名女子2名 【高校生】男子1名女子1名	奄美の自然に魅せられた画家田中一村の生涯を紹介し、一村が愛した奄美を体験し、そこで描かれた作品を実際に見ることを観光プランとすることを提案した。

5.2.5 表彰内容

来賓による審査を経て、シンポジウムにおいて発表した班のうち、次の班について表彰がなされた。

- 市長賞 : 2班「ハートロック」
- 観光協会賞 : 4班「奄美とルリカケスの未来～絶滅危惧種を脱出～」
- 審査員特別賞 : 9班「～ありがっさまりようた～鶏飯」
10班「画家 田中一村 ～奄美大島が一村を変えた」

5.3 報道事例

5.3.1 KTS 鹿児島テレビ

2016. 11. 24 KTS 鹿児島テレビ ニュース

国際教養学部が観光シンポジウム「奄美のシンボルを探そう・つくろう」を奄美市で開催し、県立大島北高校と連携して、島内外からみた「奄美の魅力」を比較考察した発表や、自然や食文化、地形など5つのシンボルを提案して奄美大島の観光振興の可能性を提言したことが紹介された。

5.3.2 奄美新聞

2016. 11. 23 奄美新聞「奄美大島のシンボル発表」

奄美新聞(Web)で、国際教養学部が観光シンポジウム「奄美のシンボルを探そう・つくろう」を奄美大島で開催し、県立大島北高校と連携して、島内外からみた「奄美の魅力」を比較考察した発表や、自然や食文化、地形など5つのシンボルを提案して奄美大島の観光振興の可能性を提言したことが紹介された。

<http://amamishimbun.co.jp/index.php?QBlog-20161123-2>

5.3.3 南海日日新聞

2016. 11. 24 南海日日新聞「奄美の魅力掘り起こす観光振興シンポ」

南海日日新聞(Web)で、国際教養学部が観光シンポジウム「奄美のシンボルを探そう・つくろう」を奄美市で開催し、県立大島北高校と5つのテーマでプレゼンしたことや、奄美の新たなシンボルを提案して奄美の魅力を掘り起こしたことが紹介された。

<http://www.nankainn.com/local/%E5%A5%84%E7%BE%8E%E3%81%AE%E9%AD%85%E5%8A%9B%E6%8E%98%E3%82%8A%E8%B5%B7%E3%81%93%E3%81%99%E8%A6%B3%E5%85%89%E6%8C%AF%E8%88%88%E3%82%B7%E3%83%B3%E3%83%9D>

6. 事後研修

次の日程・場所・内容で事後研修を行った。

2016年11月24日(木)～12月12日(日)

月/日(曜)	地名	内容
11/24(木)-11/29(火)	千葉商科 大学	<u>【大学生】</u> ポスター発表用ポスター作成
12/5(月)-12/12(日)	千葉商科 大学	<u>【大学生】</u> ポスターセッション ※12/6(火)～12/8(木)の12:10-13:10の間はコアタイムとし、 各班の説明員がポスター前に常駐して質問に答えた。

6.1 ポスターセッション

奄美大島での研修日程を終えた後、ワークショップを通じて議論した内容をもとに、大学生のみで、班ごとのテーマで発表用ポスターを作成した。

ポスターは班ごとにA0サイズでカラー印刷し、大学キャンパス内1号館エレベーターホールのパネルに掲示した。

このポスターを用いて、一定期間中ポスターセッションを実施した。そのうち3日についてはコアタイムを設定し、各班の説明員がポスター前に常駐して質問に答えた。ポスターセッションについては、評価用紙を配布して、内容と説明の2観点について、教員、学生による評価を行った。評価結果は集計し、事後的に表彰式を行った。

6.2 表彰内容

教員、学生投票により優秀班を決定し、12月19日ホームルームにて表彰が行われた。

- 学部長賞：13班（奄美ミステリー ～白馬がおちてきた～）
- 教員賞：11班（いきむん新聞 アマミノクロウサギ）
- 学生賞：13班（奄美ミステリー ～白馬がおちてきた～）

7. 評価

7.1 観光振興シンポジウム来賓者による評価

7.1.1 発表に対する講評

観光振興シンポジウム来賓者によるシンポジウム内での講評内容の抜粋により、本取り組みについての地元有識者による評価を示す。

奄美市教育委員会 教育長 要田 憲雄 様

こうした高校生と大学生とのコラボレーションが行われ、シンポジウムが行われることが、高校生の活躍を発信するための貴重な機会になる。このことは、先日に開かれた奄美の高校の振興策を協議する場において、県教委に対してすでにアピールしてある。一連の企画をしてくださった宮崎館長に感謝したい。

高校生と大学生が共同して、わずかな日数でこれだけの成果を成し遂げたことに、心を打たれ感動した。こうした貴重な機会を得られた大島北高校は、これからもっと伸びていくと期待される。今後も関係を続けていってほしい。

私は、発表の中で提案された「ハートロック」について、地元で60年以上生きてきたが、全く知らなかった。ぜひ自分自身でも見て見たい。学生たちの素晴らしい発想に驚いた。

あまみ商工会 会長 奥 篤次 様

田中一村は、奄美の子どもたちにも大きな精神的影響を与えている。一村の発表をした班については、ぜひもっと様々な一村の生活面などのエピソードも発掘探求してほしい。実際私自身も幼少の頃に焼き物や染物の工房で一村さんにお会いしたことがある。

シンポジウム全体を通じて、とても新鮮な、心を揺さぶられるような感じがした。観光業を45年もやっていると、新しいものを見る感情が鈍ってきてしまう。みなさんの発表を聞いていて、夢や希望、未来がどこにでもあるということを感じさせられた。奄美は宮廷文化の影響を受けていない。権威によるのではなく、人と人が出会うところから始まる。奄美には人を恋しく思う考え方、先祖崇拝、自然崇拝の文化、ある意味では日本の原点と言えるかもしれないところがある。人生で壁にぶつかった時には、奄美に心のふるさどがあるということ思い出して、また島に来て欲しい。

奄美大島商工会議所 専務理事 川口 智範 様

地域活性化のためには、若者・馬鹿者・余所者の発想が必要だと言われている。今日は、若者・余所者からの発想で勉強をさせてもらった。あとは我々上の世代が馬鹿者を育てる役割を果たさなければと感じた。

奄美大島観光協会 会長代行 越間 得晴 様

「奄美のシンボルを探そう・つくろう」というシンポジウムの審査員を依頼されたとき、ぜひ参加したいと思った。私自身も観光産業に携わって、いろいろと悩みながら取り組んで来ている。本土の旅行会社に奄美の旅行商品を作ってくれと依頼する時「奄美のシンボルって何ですか」「海が綺麗だといっても、沖縄も綺麗ですよ」「屋久杉みたいなものはないのですか」「自由の女神みたいなものはないのですか」というような反応をしてくる相手と、ずっと格闘してきた。考えていくうちに、奄美は自然が美しいが、そうした自然を畏れ敬いながら育んで来た生活文化が一番の特徴。ただし、それを視覚的に伝えることは難しく、言葉で伝えようと努力してきて、それがだんだんと受け入れられてメディアでも取り上げられ、浸透してきたと考えている。ルリカケスの発表には、奄美の地元の視点、都会の大学生の視点がそれぞれに違うことが示されており、それぞれの反応の違いが重要であると感じさせられ、素晴らしかった。

奄美群島広域事務組合 豊 勇樹 様

奄美の発展のために、芸人さんなど、全国的な知名度のあるタレントの方々なども、来島をして活動してくれている。若い皆さんの力で、そうした活動についても注目をしてもらい、SNSでも拡散してもらいたい。

奄美群島観光物産協会 松元 英雄 様

奄美大島だけでなく、奄美群島を北から南までの5島、活性化させることを仕事としている。その事業の中で3年ほど前に、それぞれ島において「島のいちばんを探そう」という取り組みをしたが、なかなか結論が出せなかった、いろいろなアイデアが出るが決めきれなかった、という経験をした。今日の発表の中では、赤尾木湾のクレーターをシンボルにするという提案は予想していなかった。ルリカケスの班のプレゼンテーションが大変上手で、伝わってくるものがあつた。また、スマートフォンを手元原稿として発表をしていた班があり、若者たちが新しい機器を使いこなしている様子を印象深く受け止めた。

あまみ大島観光物産連盟 恒吉 美智子 様

今までになかったような意外な視点からの発表をしてもらったことで、観光業に携わっている者の一人として色々な発見があつた。気になった点としては、5班それぞれが、観光客が増えることと、地域が活性化することが、イコールであるという前提に立って発表をしていたこと。一般的にはそのとおりなのだが、本当にそうなのか？ということについて、一旦立ち止まって良く考えてみてほしい。どうなったら地域が活性化したことになるのか、そのために観光がどのように役に立つのかを考えると、観光がより素晴らしい役割を果たせるようになる。

7.1.2 考察

研修の意図をよくご理解いただき、的確な評価をしていただいたと考えている。観光・商工などをはじめ、地元有識者らが、「学生ならではの」視点による提案を新鮮に受け止めてくださり、今後の業務に活かしていく姿勢を示していただいたことは、本研修の実効性を示せたものと判断される。

7.2 鹿児島県立大島北高等学校 高校生による評価

大島北高等学校にて、2016年10月18日(火) 14:00~15:10に、特別講義を、千葉商科大学国際教養学部長・宮崎緑教授が講師となって実施した。ここでは、その講義を受講した生徒による感想の一部を示す。

7.2.1 特別講義の感想

● 生徒(高校1年生)

私は今回の講演で奄美のすばらしさを改めて知ることができました。小さいころから奄美で生活していると、奄美の大自然や生き物などが“あたりまえ”の存在と感じてしまいがちだけど、今日のような講演を聞いたり旅行などで奄美から出てみたりすると奄美の歴史や自然はとて奥が深く私たちはすばらしい所に住んでいるのだと思いました。

このすばらしい伝統や大自然をいろいろな体験をして、多くの人に私達が伝えていかなければならないと思いました。

● 生徒(高校1年生)

今日は「奄美から世界をみる」というテーマの講演でした。地政学からみる奄美など新しい視点でみることができました。また奄美群島の方言や歴史、田中一村に関することまで知ることができました。赤尾木湾の隕石の話や尖閣諸島の問題など、僕たちの身近な場所で起こった事、起きている問題にも改めて知ることができました。また聞き書きなどにも積極的に参加して僕たちの奄美をもっと知れるようになりたいと思いました。

● 生徒(高校1年生)

自分は奄美大島や南西諸島が他国に重要視されているのは知っていたが、石油の輸入の道や米国の防衛ラインなどが諸島の上を通っていることは初めて知った。また北朝鮮の不審船が奄美近海で沈没したことも初耳だった。自分が生まれた年にそんな事があったとは知らなかった。宇宙ステーションからの地球の夜を撮った写真を見たときは、まだ多くの国々が貧困や環境の影響で電気が使えないのだな…これがいつまで続くのかな…と思った。今日の講義を活かしこれから奄美の郷土や風土、環境を多くの人たちに知ってもらえるようにがんばっていきたい。

● 生徒(高校2年生)

奄美に住んでいるのに、奄美の自然のありがたさなどを理解できていませんでした。今日の講演を聞いて、改めて自然のすばらしさを実感することが出来ました。方言も今の若い人たちが受け継いでいけないといけないなと思いました。

● 生徒（高校2年生）

奄美の方言は島だったり、北部や南部で言葉が違ってきたりしているのは知ってはいたけど全く聞きなじみのない言葉が多くて驚きました。奄美は世界から見ても色々な意味で深く結びついてたのもびっくりしました。工作船事件の話は親や親戚からどんな内容だったかは聞いていたけど、事件が起こった場所が奄美であった事は知らなくて少し怖くなりました。奄美にずっと住んでいるからこそ当たり前だと感じ、気づかない自然や文化をもう一度見つめ、宝として大切に、次の世代につなげていく事はとても大切だなと感じました。世界をもっと知るためには、自分を理解し、コミュニケーション能力を高めていくことが大切だと感じたので、意識していこうと思います。

● 生徒（高校3年生）

今日の講演を聞いて、奄美大島のことについて、もっと知ることができました。私は生まれも育ちも奄美で、18年間ずっと奄美大島に住んでいるけど、昔の奄美のことなど、知らないことがたくさんありました。私は奄美大島が大好きです。なので、卒業しても奄美に残ることを決めました。ですが、まだまだ知らないことがたくさんあります。方言や島唄、大島紬などです。方言や島唄はこれからもあり続けてほしいので、じいちゃんやばあちゃんなどに教えてもらい、私たちが大人になったときに、子どもたちに伝えていけたらいいなと思います。奄美の自然もとても素晴らしいので、これを維持して行ってほしいです。

7.2.2 考察

講演後に生徒たちが書いた感想文の内容から、生徒たちが、自分たちが生まれ育った奄美の魅力について改めて考え、奄美の文化や歴史などを学ぶきっかけを得たことが読み取れる。また、郷土の歴史や文化に対する興味・関心を喚起することができ、積極的に学び考える姿勢を育てることができたというように考えられる。

7.3 鹿児島県立大島北高等学校 教員による評価

7.3.1 振り返りコメント

本取り組みの終了後に、ワークショップを合同で行った鹿児島県立大島北高等学校教員から振り返り資料が寄せられた。そこからの抜粋により、本取り組みにおいて地元側の高校生を指導する者からの評価を示すものとする。

①（より深いワークショップにするための改善点）

今後も進展するのであれば、こちらがビデオメッセージをお送りしたようにテーマやプレゼンをあらかじめ提示していただければそれに応じて詳しい生徒を対応させたり、高校生にも調べさせたりすることができたかなと思いました。

一部の生徒はそれを察知して、自分から島唄や紬の研究班を探して役に立とうと積極的に動いていました。屋仁集落や平瀬マンカイやショチョガマをやっている集落の生徒とその研究班が出会わなかったことが残念でした。

しかし、ハートロックや赤尾木湾はちょうど赤尾木集落の高校生やハートロックに詳しい生徒の出会いがうまく組み合って面白い発表になったと思いました。

②（大学生の発想の素晴らしさを感じました。）

大島紬をデザインとしてとらえ直しプロジェクションマッピングで展開するという発想は素晴らしかったです。小さなハートロックを奄美のシンボルに展開する奇想天外さに感動しました。同じ発想で行くとケンムンにまつわる様々な地点もパワーポイントとして観光のシンボルになるのかなと感じました。

個人的には奄美の戦跡も沖縄戦の陰に埋もれているので、太平洋戦争を考える上で、歴史遺産的なシンボルにならないかと考えることでした。古仁屋の震洋特攻基地や喜界空港、赤木名の防空壕跡、海岸にあった「たこつぼ」など。

③（生徒が学生と関わりコミュニケーション能力を向上させることができたことが素晴らしかった。）

生徒が学生と関わってうまくコミュニケーションを取っていたので非常によい経験できていたと思います。

7.3.2 考察

事前に大学側と高校側とでテーマやプレゼンの内容のすり合わせをする可能性については、ご指摘の通りであるので、努力したい。ただし、限られた時間の中で、離れた場所にいる学生たちと生徒たちがコミュニケーションを取れる機会を増やすことは、現実的にはなかなか難しいようにも思われる。工夫と割り切りを要する問題である。また学生たちの中には、奄美に到着して以降の研修や体験を通じて、事前に準備していたテーマとは別のテーマに急遽変更することにした班もある。相手先と時間をかけて調整をしながら取り組みを積み上げていくこと、学生や生徒の自主性を重んじながら柔軟に臨機応変に取り組みせる余地を残してやることの、両面について学習環境づくりをしていく必要があると考えられる。

7.4 千葉商科大学国際教養学部 学生による取り組みを通じた評価

7.4.1 研修まとめレポート

一連の研修に参加した千葉商科大学 国際教養学部生らによって、「奄美のシンボル」を提案することを題材に、事後的にまとめられたレポートの中から、4名の学生のものを抜粋して示す。

● 学生 (1) 「奄美のシンボル」研修まとめレポート

テーマ：シマ唄

1. 目的

衰退し、後継者の減少が危惧されている奄美のシマ唄と方言。シマ唄をシンボルにしアピールすることで奄美の知名度を上げるとともに、奄美の若者にシマ唄を継承、文化を守ることとする。

2. 事前調査

無形文化は、その地の生活や特徴を伝えるものとなっている。そこで奄美の無形文化について調べたところ、シマ唄の記述があった。分かったことは、沖縄の島唄は琉球文化の芸として発展したものである一方、奄美のシマ唄は「シマ（集落）」の教えや想いを伝えるための唄であるということである。シマ唄の具体的な歌詞の意味も調べたが、方言が理解できず、難しかった。恋愛の唄、感謝の唄、歓迎の唄などジャンルがあることがわかり、どの唄が島では有名なのかを聞くためにも、いくつかの唄をピックアップした。

恋愛の唄：マンコイ

合いの手（ハヤシコトバ）の「ヨーイマーンコーイ」から来た名前という説
男女が仲良くなる「満恋」という説
歌詞訳：港口までは、かな（愛しいひと）に送られて、渡中（海）に
乗り出せば、あとは潮風を頼りにします。

感謝の唄：俊良主節

「俊良」は男性名「主」は良家の主人につく尊称
基俊良という奄美初の国会議員がテーマ
歌詞訳：親が生んでくれたおかげで、この明さ（世の中）を
知ることができました。
私を生んでくれた親の、100歳までの長寿を願いましょう。

歓迎の唄：朝花節

奄美大島では必ずと言っていいほど最初に歌われる唄
声慣らし、座を清める、挨拶の意味がある唄
歌詞訳：久しぶりにあなたにお会いしました。
今お会いしたら、今度はいつ会えるでしょうか。

3. 現地調査

1日目の夜、シマ唄を唄ってくださった福島さんにインタビューした。
方言はシマごとに違うこと、朝花節が有名なことがわかった。
三味線の絃は沖縄の物より二分の一細く、弦をはじく竹製の撥（ばち）が自作であること

が奄美の特徴であるという。

唄は男女の掛け合いで裏声を使い、音程は女性に合わせる。これは、奄美大島が女性の神を信仰していることが由来とされ、日常生活も比較的女性の権限が強い。

現地のスタッフにインタビューした。

奄美大島は昔、個人間での恋愛に厳しい風潮があった。現在でも結婚は親から決められた人とするという考え方がある。奄美では、異性と会える機会は、男女数人で向かい合い、掛け合いで唄を唄うという奄美独特の席だけだった。そんな中、唄に込めることで恋しい想いを伝えていたという。

シマ唄の合の手である鳩笛（手笛）は遠くまで響き、人によって音色が違う。

男性が遠くにいる意中の女性に対して鳩笛を吹き、女性はその音色が恋人の物であると分かると、耳を傾けていたという。

シマ唄は基本的に歌詞が決まっていない。リズムに合わせて歌詞は自由に唄える。自然に広がっていった文化であり、発祥年は不明。

高校生にインタビューをした

朝花節以外唄を知らなかった。方言が分からず、シマ唄を唄えない。

歌う機会も卒業式など大事なイベントに限られる。

厳しい恋愛の風習はなくなったが、女性が強いのは変わっていない。

方言は使えるようになりたいし、なくなってほしくないという意見があった。

4. 考察

難しい方言と決まりのない歌詞、楽譜にできないリズムと音は口伝で継承されてきた。だがシマ唄を唄う機会のほとんどない今、方言もシマ唄も廃れていく一方だった。

5. 結論

シマ唄のミュージックビデオを奄美の海で撮影し、歌詞に観光スポットを盛り込む。

方言を少しでもわかりやすい言葉に変える。

SNSで拡散し、奄美に興味を持つきっかけにする。

こうした取り組みを、奄美の発展のためではなく、まずはその文化を守るためのシマ唄をシンボルとする。

6. ポスターセッションでの質問と答え

Q1. この発表を一言で

A1. 無形文化を継承し、文化を守る

Q2. SNSなんてみんなやっているのではないか

A2. 手軽な情報発信で一番効果があるのはやはりSNSだ

Q3. 海外向けではないのか

A3. まずは日本人の観光客を増やし、大勢の観光客が来ても大丈夫のように島民を慣れさせる

Q4. 海外のリゾート地（ハワイ）との違いは

A4. ハワイがにぎやかで穏やかであるならば、奄美は和やかでのどかである

7. まとめ

シマ唄を全国に向け発信する方法にもっとインパクトが欲しいという意見が多かった。
島民の想いと現状を知らない人が興味を示すポイントが、無形文化には足りないものであり、無形文化だけでのアピールは難しい。
現状の打破には島民のやる気も大事だと感じた。

● 学生 (2) 「奄美のシンボル」研修まとめレポート

<目的>

奄美大島の歴史ある大島紬を伝承し、また、新たな流行を呼び起こすこと

・1300年の歴史がある大島紬だが、私達が大島紬について、調べるまでは何も知らなかったように、大島紬について知らない人が多いことだろう。その伝統が途絶えてしまう可能性があること、また、全国的、世界的にも有名になってほしいという思いが生まれたため、今回の目的を設定した。

<事前調査>

・大島紬とは、奄美大島を本場生産地とする着物で、日本の民族衣装を代表する着物の女王とまで言われ、高級着物を着る人にとってのステータスシンボリックの商品である。約1300年の歴史を誇る、日本の伝統工芸品である。

・大島紬の柄について

龍郷柄：奄美を代表する古典柄で女性用として奄美に自生するソテツをデザインしたもの、ソテツの葉と実を幾何学模様で表現した大島紬の代名詞的存在。

亀甲柄：男物の小付け模様の代表で亀甲の形は縁起が良く男性の風格を一段と引き立てるため結納返しの活用等で定評がある。その他、男性用の模様は各々の工場作者により創作され多種多様な模様がある。特に西郷柄、有馬柄、伝優柄、白雲柄、花ん華柄などがある。

<現地調査>

1. 大島紬村にて製造工程を実際に見学、体験した。

- ・シャリンバイの煎出液と泥土に含まれている鉄塩類の媒染によって独特な黒色に染色される
- ・製造工程は簡単に以下の通りである。

布を織る(木綿糸で絹糸をきつく締める)、染める(シャリンバイの煎出液と泥土を使用する)、色をすりこむ(木綿糸を解いた絹糸に塗料をすりこむ)、柄に合わせて織る。

2. 現地の高校生から大島紬について聞くことができた。要点を以下にまとめる。

- ・大島紬は持ちが良く、何世代にも渡って着ることができる。
- ・若い世代の人はあまり着ない。
- ・成人式や島唄の大会では着る。
- ・夏用と冬用があり、夏用は少し生地が薄くできている。

<考察>

・現地の人でも、若い世代の人は大島紬をあまり着ない現状があるため、若い世代の間で親しみのあるものにするべきである。

- ・大島紬について情報を発信していくべきである。
- ・大島紬をもっとPRしていくべきである。

<結論>

大島紬の伝承、また、流行に向けての私達のいくつかの提案をまとめる

- ・小物にして私達の年代でも手の届き安い価格設定にする。

(具体的には、アクセサリ、ポーチ、バッグなど)

- ・今は情報社会なので、SNS で拡散する。
- ・キャラクターに大島紬を着せてPR する。
- ・HP やゆるキャラを作り、親しみやすくする。

<ポスターセッションにて>

- ・久保先生から提案について3つご指摘があった。
1. 安い価格設定とは具体的にどれくらいか考えるべき
 2. SNS で拡散した事によって成功した事例があれば出したほうがいい
 3. ゆるキャラは奄美でやっているかもしれないため調べた方がいい

このコメントへの返答として、次のように答えた。

1. 個人的には、1,000 円から 2,000 円の小物であれば私達の年代も手が出しやすいと思う。
2. はなまるうどんの事例では、テレビ番組で話題になったものが、SNS 上で話題になり、アクセス数は通常の 24 倍にはね上がった。

3. 鹿児島県奄美市には、コクトくんとロビンちゃんというゆるキャラが存在する。このキャラクターが大島紬を着ている写真もある。

・ハリト先生から「実際に小物を飾っておいたほうがよかったのでは」とのご意見があった。このコメントへの返答として、「実際に物があれば説明により説得力があると思った、今回のポスターセッションの反省点の一つである」と答えた。

・施敏先生から「私達が実際に染めたものは、洗濯をしたら色落してしまっただが、商品化されているものは、色落ちに関してどのような対策がなされているのか？」という質問があった。このコメントへの返答として、「泥染めは洗えば洗うほど本来の美しさが増し、色も決して落ちることはない」と答えた。

● 学生 (3) 「奄美のシンボル」研修まとめレポート

1. 目的

今回の研修の目的は奄美のシンボルを探す・見つけるという『観光シンポジウム』である。私は6班に所属し活動を行った。

2. 事前調査

私たち6班は事前調査で「東京・千葉に住んでいる私たちが考える奄美のシンボル」としてシンボルになりそうなものをインターネットで調査した。ここで私たちがシンボルになるだろうと考えたのは、ハートロックとハブである。ハートロックは様々なホームページで「ハートロックとは本町赤尾木集落の東側に面する海岸、東海岸にあるハート型の潮だまりのことです。干潮時にのみ現れる隠れたパワースポットとして話題になっています。」(龍郷町HPより引用)などのように紹介されており、近年奄美大島の観光スポットの1つとされている。ハブは奄美諸島周辺と沖縄本島周辺にしか生息しない珍しい蛇で強力な毒を持っている毒蛇としても知られている。これらのことからハートロックはシンボルとしてふさわしいと考えた。

3. 現地調査

事前調査を踏まえて、奄美大島高校の生徒のみなさんに現地に住んでいる人が考える奄美のシンボルについて現地調査をした。ここでは時間の都合上2人の生徒による意見のみを参考としている。現地に住んでいるみなさんは観光スポット＝シンボルとはかんがえておらず、伝統的な祭りや奄美特有の生き物、食べ物などをシンボルと考え、またシンボルとしてアピールしたいと考えていることがわかった。伝統的な祭りとして挙げられたのは「8月踊り」と「種おろし」だ。これらは豊作や健康祈願のために始まったと言われている。生き物では「アマミノクロウサギ」や「ルリカケス」など貴重な生き物が挙げられた。食べ物では「鶏飯」だけでなく「塩豚」という家庭の味が挙げられた。これはおじいやおばあが作る伝統の味だそうだ。また、東京などの都会に憧れがあるが奄美が一番ホッとすし、誇らしいと話していた。

4. 考察

現地調査から奄美に住んでいる方々は伝統的なものや奄美特有のものを誇らしく思っていることがわかった。私たちは現地に滞在している間に実際に「8月踊り」と「鶏飯」を体験した。「8月踊り」は初めて体験する人でも簡単に楽しむことができ、シンボルとした際にアピールしやすいのではないかと考えられる。「鶏飯」はお茶漬けのような料理でどこか懐かしいような優しい味で値段もお手頃なため、これもシンボルとして良いと考えた。

5. 結論 (提案)

私はこれらの調査を踏まえて、「誇らしい」と思う心こそを真のシンボルとしてふさわしいと考える。都会に住んでいる私たちは奄美のような自然がたくさんある場所をうらやましく思い、リゾート地などと呼び憧れの場所としている。逆に奄美などに住んでいる人々は東京などを都会で発展していて憧れだと話す。しかしどちらに住んでいる人も地元に戻るとホッとして、結局地元が一番良いと考えている。自分が住んでいる場所には無いものがある場所に憧れつつも地元が誇らしいのである。特に奄美の方々は伝統的なものなど地元を誇らしいと思う気持ちを強く感じられた。このような、地元を「誇らしい」と思う心をシンボルとしてアピールしていくのが良いのではないかと考える。

● 学生 (4) 「奄美のシンボル」 研修まとめレポート

私はアマミノクロウサギを奄美大島のシンボルにしようと考えた。その最大の目的は、奄美へ訪れる人々を増やす事である。

事前調査ではアマミノクロウサギの特徴と奄美大島に来る観光客の数についてインターネットを使い調べた。まず、アマミノクロウサギの特徴は、夜行性であり、子供と親の巣は別々である。また、一般的なうさぎと比べ、耳と両足が短い。奄美諸島にしか生息しておらず、希少種として絶滅が危惧されている。

次に、奄美と沖縄の観光客を比較した。どちらも平成 26 年度の統計データを参照した。奄美諸島は 708,763 人であったのに対し、一方沖縄県には 7,169,000 人と、10 倍以上の人数が訪れたことがわかった。沖縄は多くの魅力的な観光スポットがあることで知られており、奄美は沖縄に比べてそうした魅力が乏しいことから、観光客が伸びていないのではないかと予想された。

現地調査にて、私は現地の高校生や私は地元の人に対するインタビューを行い、アマミノクロウサギが地元の人にとってどのような存在であるのかを調査した。そこで新たに分かったことが二つある。ひとつめは、アマミノクロウサギは地元の人も見ることが少ないような生き物で、非常に珍しく、幸運の象徴のような動物であると見なされているということである（しかし、たまたま車にひかれたうさぎが道路に横たわっているのを見かけるという話もあった）。

ふたつめとしては、アマミノクロウサギにまつわる興味深い言い伝えがあるということである。いわく「昔、アマミノクロウサギは特徴のない普通のうさぎであった。あるとき、人間はハブを恐れ、ハブを殺す計画を立てていた。アマミノクロウサギはハブと仲が良かったので、その計画を知って、ハブを逃した。怒った人間達は、アマミノクロウサギを捉え、前足・後ろ足・耳を切断して火炙りにした。アマミノクロウサギは火の中で血の涙を流した。そのため、アマミノクロウサギは足が短く、体が黒く、目が赤くなってしまったのである。」この面白くも、残酷で生々しい言い伝えは非常にインパクトがあり、現地に行かないと聞くことができないものであったように思われる。

こうした一連の調査を通じて、アマミノクロウサギは奄美のシンボルとして適当なものであると考えた。その理由としては、奄美諸島の固有種であり、他のうさぎと容姿がはっきりと違う特徴があること（前後の足、耳が短い）、また、ユニークでホラーな都市伝説が存在していることで、他の奄美諸島に存在している動物よりインパクトがあるとみなせることが理由である。

アマミノクロウサギをシンボルにするための提案をする。まず、アマミノクロウサギをキャラクター化した既存の「ゆるキャラ」である「コクト君」「ロビンちゃん」を活用すること、さらには、新規に私たちが構想している、コップのフチ子のような「コップのクロウサギ」と名付けた公式キャラクターとその関連商品を全国的にプロモーションしていく事である。このとき、全国の様々な「ゆるキャラ」の1つとして埋没してしまわないようにするために、「コクト君」「ロビンちゃん」などの著作権を主張しないという工夫を勧めたい。参考として、熊本県の「くまモン」を挙げる。この「くまモン」は、土産物など多くの商品に無料で利用できるようにしたことで、認知度が高まり、人気広がったのだという。奄美の「ゆるキャラ」も、そこで「くまモン」のように、空港などの観光客がよく通る場所に集中的に設置して、まずは認知度を高めていってはどうだろうか。

7.4.2 学生による取り組みの総評と考察

学部一年生が主体となって取り組むものであり、一般的な意味でのフィールドワークの経験も少なく、文献調査スキルも不足している中で、事前にまとめた資料を現地に持参する形でワークショップからシンポジウムでの発表を行わせるということに不安もあったが、学生たちはよく学び、成果を挙げてくれていたように思われる。

文献やインターネットなどによる調査をさせるだけでは、実感に乏しいため発想が上滑りする危険があった。そこで、事前研修において、奄美の歴史・自然・文化についての入念な講義を行い、また、地元高校生である大島北高等学校の聞き書きサークルの成果物であるDVDの視聴などを通じて理解を促すようにしたところ、それぞれの班がユニークな着想で工夫して事前の準備をすることができていたと考えている。

奄美大島における現地研修では、まずは奄美の美しい海と空、浜辺の様子に親しみつつ、奄美の自然、食、人の温かさ、文化や産業などに触れて、学生たちは大いに触発されていたようである。訪問先での活動への参加や、隙間時間で自発的に関係者へのインタビューを実施するなど、意欲的な取り組みを見せていたことが、成果につながる要因であったと言えよう。

学生たちは、大島北高等学校の生徒の方々とのワークショップにおいて、活発に質疑が飛び交い、そこかしこで笑いが起こるなど、親密で良い雰囲気の中で、互いに貴重な時間を過ごしながらかつて取り組むことができていた。双方の学校の中でリーダー的役回りをする若者が、互いに良い成果を出せるようにしようと意識して周囲を励まし努力をしてくれていたことが大きく貢献していたものと思われる。

観光振興シンポジウムでは、同じ班の大学生と高校生とが舞台上でマイクを受け渡ししながら、適切な役割分担のもとで発表をテンポ良く進めていた姿が印象的であった。来賓としてお招きした地元の教育・観光・商業関係に関わる方々は口を揃えて、発表した若者たちのユニークな視点と、奄美の外からの視点・内からの視点のコラボレーションによる成果を高く評価して下さった。

一連のシンポジウムでの発表、ポスターセッション、まとめレポートなどの成果物については、奄美の観光シンボルを提案するという枠組みで考えると、専門的見地からすれば不十分といえるような点が多いとはいえ、準備期間の短さや学生・生徒の学修段階の状況を考慮すれば、たいへんに挑戦的な内容であったと判断できる。県外から奄美を訪れた大学生と奄美大島の高校生とが、短い期間に仲良く一緒に成果を作り出すという形を成し遂げ、それを地元の有識者が大いに褒めるといふ展開は、かつて無かった新しいもので、今後の同様の取り組みのモデルになると考えられる。

7.5 千葉商科大学国際教養学部 教職員による評価

7.5.1 全般を通じた振り返りコメント

本取り組みの終了後に行われた振り返りの会議において、一連の研修を引率した千葉商科大学国際教養学部の教職員それぞれが提出した資料からの抜粋により、本取り組みにおいて奄美大島を訪問した学生たちの指導者・関係者としての評価を示すものとする。

実施日：2016年12月20日

会議参加者：

学部長 教授	宮崎 緑
教授	柏木 将宏
教授	久保 裕也
教授	五反田 克也
教授	鈴木 恒雄
教授	高橋 百合子
教授	山田 武
教授	渡辺 恭人
准教授	太田 昌志
准教授	施 敏
専任講師	常見 陽平
専任講師	ムズラックル ハリト

- 事前に手厚い「予習」ができたことで、現地での研修がより実りあるものになった。
- 学生に現地ですべて自由に使える時間と行動範囲（海など）に余裕を持たせたことで、学生の自主性に応えられた。反面、視察・体験が限定されてしまった。
- 地元高校生とのコラボレーションは内外で高く評価された。学生に自信を持たせた。高校生にも刺激を与えられた。
- 地元自治体や業界団体等の協力は全面的かつ好意的だった。
- 目的をわかりやすくしたため、全員がワークショップに参加できた。
- 地元の人々の考える奄美のシンボルと、都市部の大学に通う学生の考える奄美のシンボルとの、両者をすりあわせるという作業の指示は、高校生・大学生にとって取り組みやすいものだった。
- 高校生と大学生のコラボレーションは、時間が限られていたとはいえ、うまく取り組んで期待通りの成果を出してくれた。特に、シンポジウムでの代表チームによる発表の中で、発表内容に高校生の意見が反映されるように工夫がなされていたこと、舞台上で高校生が発言する役割分担がなされていたことなどが、奄美側の関係者から良い評価を受けた理由であったようにも思われる。
- グループワークやシンポジウムを通じて、取り組んだ学生たちに、さまざまな気づきを与えることができた。奄美の人にとってのシンボルと、東京・千葉など奄美を訪れる人にとってのシンボルは異なるものであるが、その接点を探りすり合わせていくプロセスこそが重要で、意義深いのだということが示された。

- 学生たちとしては、事前講義を受けさせても、なかなか実感・意欲が沸かなかったであろうし、事前の準備がやや不徹底となってしまったことは、仕方がなかったようにも思う。しかし、観光のビジネスモデルに関する基本的な事柄や、離島の振興についての現状と課題などについて、もう少し知識を与えてやれたら、もっと良い内容での取り組みをさせることができたかもしれない。
- たとえば、ハートロックの発表では、他国の観光地におけるハート型の地形などをシンボリックに利用している事例が紹介されていた。他の観光地における観光シンボルなどと比較するのはよい。できれば、さらに、観光サービスを体験・享受できる人数的なキャパシティ、観光サービスの維持整備費用の観点や、観光客から徴収するサービスの対価をどのような額で設定すべきかといったところにまで踏み込ませられるとよかった。
- 審査員の方から、「観光で人を呼び込むことが奄美にとって良いことであるかどうか、という冷静な視点も持つべき」「地域おこしにおける『若者・余所者・馬鹿者』必要論を再認識した」などのコメントを受けたが、そうしたコメントの文脈を共有できるような、事後的な教育が必要であるようにも思われた。
- 取り上げたシンボルとなりうるものへの、調査不足、第三者視点の欠如（場所であれば掛かる時間、食べ物であれば価格など）が、次年度以降への課題と思われる。
- 自分のカメラで写したもの、自分の耳で聞いて、自分の言葉で書いたものをもとに、人に伝えるという姿勢が見えなかった。
- 高校生とのワークショップについて、しっかりとコミュニケーションをとっており、成果はあったのではないかと思う。

資料 8

8-1. 研修中の写真



11/21 奄美空港に到着時に歓迎を受ける



11/21 奄美パークにてガイダンス



11/21 原ハブにてハブの生態などについて研修



11/22 カヌー準備中にワークショップ準備



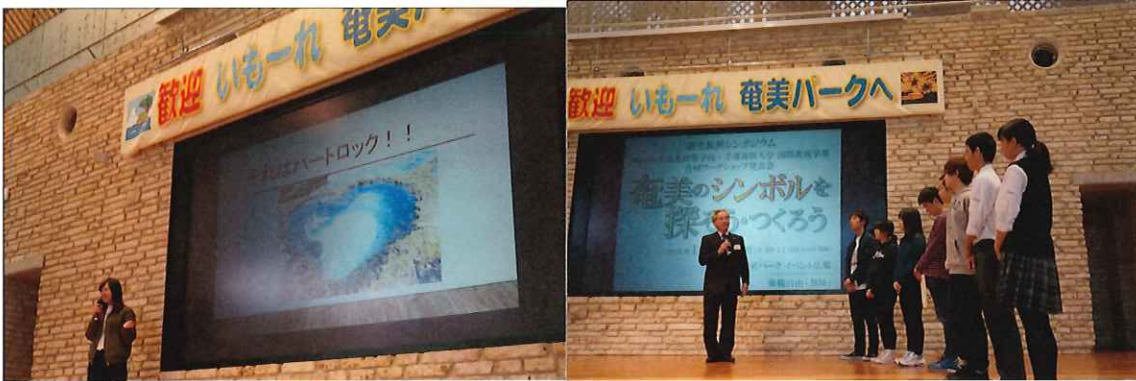
11/21 大島紬村にて絞り染め体験



11/22 カヌー体験



11/22 奄美パークにてワークショップ実施の様子



11/23 奄美パークにおける観光振興シンポジウム実施の様子



11/23 浜辺にて記念撮影

8.2 研修のしおり



2016年度 フィールドワーク in 奄美 研修のしおり

奄美のシンボルを 探そう・つくろう

2016年11月21日～11月23日



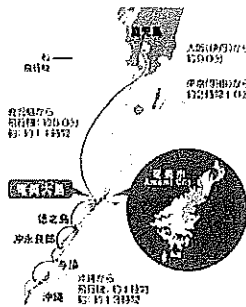
Faculty of Global Studies

7. 奄美大島の基本情報

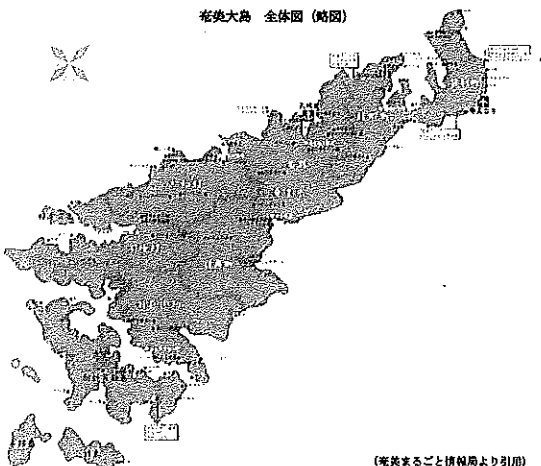
奄美大島は、鹿児島から南へおよそ380キロメートルに位置し、全国の離島の中でも沖縄本島、佐渡島に次ぎ3番目に大きな島です。

日本で2番目に大きいマングローブの原生林、国の特別天然記念物アマミノクロウサギなど太古の生命が息づく金作原生林、奄美十景として知られる夕暮の美しい大浜海岸公園、美しい水平線と亜熱帯の風景を思い起こさせるあやまる岬など多くの自然と景勝地を有しています。

伝統文化として古くから伝承された五穀豊穡を祈り、祝う島唄や八月踊、中世時代に都で装飾品として使用されたヤコウガイを用いるらでん細工や貝さじなどの製作遺跡など歴史とロマン漂う空間が随所に見られます。



奄美大島 全体図 (略図)



(奄美まるごと情報局より引用)

9. ワークショップ及び観光振興シンポジウム

11月22日(火)、23日(水)は、鹿児島県立大島北高校の生徒との協同研修として、ワークショップ及び観光振興シンポジウムを実施します。シンポジウムには奄美市から来賓の方も多数来場されますので、各グループの指導教員の指示を守り、大学生としての自覚をもって取り組んでください。

【ワークショップ】

日時：2016年11月22日(火) 16時～18時
場所：鹿児島県奄美パーク イベント広場
内容：大島北高等学校の聞き書き調査を行っている生徒とワークショップで意見を交わし、「奄美のシンボル」の提案をまとめる。23日の観光振興シンポジウムでは、ワークショップ発表会として、奄美市長、観光協会等の方々に対し、本学学生、大島北高校生徒合同チームによる報告を行う。

【観光振興シンポジウム (ワークショップ発表会)】

—奄美のシンボルを探そう・つくろう—

日時：2016年11月23日(水) 9時20分～11時
場所：鹿児島県奄美パーク イベント広場
司会：国際教養学部 学部長 宮崎 謙 教授
発表者：千葉商科大学 国際教養学部 学生、鹿児島県立大島北高等学校 生徒
次第：1. 開会挨拶
2. 大島北高校生徒、千葉商科大学国際教養学部生 混合チームによる発表
3. 島唄披露
4. 表彰
5. 出席者謝辞
6. 閉会挨拶

【地勢】

奄美市は東経129度29分38秒北緯28度22分38秒で、鹿児島県本土から南西に約380km下った海上にある奄美大島本島の北部にあります。飛び地合併により、市の北部約5分の1が切り離されて存在する形態となっています。飛び地の北部は山の少ないなだらかな地形で、美しい海岸線を有しています。奄美市南部は大学を山岳部で占められており、学術的にも貴重な動植物が生息しています。

【気象】

奄美大島の気象は亜熱帯海洋性で、四季を通じ温暖です。降水量は全般的に多く、年間2,800mmの雨が降ります。1961～1990年(昭和36年～平成2年)の30年間の統計によると、日平均気温は10℃以下になる日がないので、本土で言う初夏、冬、早春、春に該当する季節が無く、晩秋からすぐ晩春の季節に入ることになります。梅雨は本土より1ヶ月も早く5月上旬に始まり6月下旬に終わります。また、日最高気温が25℃以上の夏日の期間が112日間もあり、九州の各地が約60日前後であることからすれば、その2倍も長いことになります。

【特産物】

奄美大島柚・・・奄美大島柚とは、奄美群島内の本場奄美大島柚共同組合の組合員より生産された伝統的工芸品「大島柚」のことです。精100%で、先染めで、手織りで柄合わせをして織り上げたものです。軽くて暖かく着れせず、着込めば着込むほど肌になじむ着心地のよさと独特の色合いが特徴です。

鶏飯・・・奄美の代表的な郷土料理として全国に知られています。鶏肉やシイタケ、鶏糸卵などをご飯の上に乗せ、鶏がらスープをかけた、さっぱりした料理です。そのさっぱりした味わいから、夏場の食欲がない時なども食べやすく、一年を通して食べることができます。昔、奄美群島が鹿撃落の直轄地だった頃に、藩の役人を接待した料理として知られていますがもともとは島でお祝いや客人へのもてなし料理として出されていました。

あまみフルーツ・・・パッション(時計草)、タンカン(ボンカンとネーブルオレンジを自然交配してきたミカン)、バンジロウ(グアバ)、すもも、パパイヤ、島バナナなどです。

8.3 観光振興シンポジウム告知ポスター

写真：大和村役場提供

観光振興シンポジウム
 鹿児島県立大島北高等学校・千葉商科大学 国際教養学部
 合同ワークショップ発表会

**奄美のシンボルを
探そう・つくろう**

2016年11/23[水・祝]9:20-11:00(9:00開場)

奄美パーク イベント広場
〒994-8704 鹿児島県奄美市笠原台1-1-1

参観自由(無料)

お問い合わせ：千葉商科大学 国際教養学部 学生事務局 (043-292-5111) / 電話：047-373-8878 (受付 月-金 9:00-17:00) / 電子メール：office@kai.ac.jp

8.4 発表スライド抜粋

発表班：2班

テーマ：ハートロック

目的

- 奄美大島は一部の人に人気があるものの、全国的に認知度が高いとは言えない。
- 奄美ならではのシンボルを見つけ、PRしていくことで多くの人に奄美大島へ招きたい。
- 観光客増加が、地域の活性化につながる。

着眼点

- 海が綺麗で、ハート型を見にくる人が多い。
- 女子ウケがよく、デートスポットとして人気がある。

事例1



奄美大島では



私たちの提案

- 奄美大島のハートロックをシンボルとしてPR
- 理由
 1. 透き通った海とハートの形が話題となる。
 2. 潮の満ち引きにより、出現する時間が限られレア感がある。
 3. 女性からの評判がよく、デートスポットとして活躍。



8-5. ポスター作品抜粋

世界に誇る大島紬

<大島紬とは>
 奄美大島を発祥の地とする絹織物で1300年の歴史を誇る日本の民族衣装を代表する着物。日本の伝統工芸品。親から子へ代々受け継がれているもので成人式で着る人もいる。どこ家庭にも1丹ある。
 柄は主に、鹿野柄・秋名薔薇・亀甲柄などがあり、模様は古典模様・幾何学模様・草花模様などがある。
 成人式に合わせ1月5日に大島紬の日があり、展示会などが行われる。

7期
 16c0008 16c0037 16c0046
 16c0057 16c0060

<目的>
 生きること必要不可欠な、衣・食・住の衣に注目した。その中で日本が世界に誇る大島紬に触れ、奄美大島にとってどのようなものかを調べ発信することで、日本人および、外国人観光客を増やし地域活性化を図る。

<製造過程>



泥染め



絹繰加工



絹縫解き



染染



機織り



完成

<結論>
 大島紬は代々伝承される古代の宝であるのに認知度が低い。実際に見てみなければわからないことが多い。大島紬が完成される約1年の行程の裏には作る人の能力と魂が込められている。SNSやメディアを有効活用し大島紬の存在、必要性、世界に誇れる伝統工芸品であることを認識してもらおう。

日本一の着物
大島紬を世界へ

1300年の歴史を重んずる大島紬

1 5期 16c0024 16c0031 16c0044 16c0047 16c0048

目的
 ★大島紬の継承へ
 ・若い世代の人が着ない
 ★大島紬を流行りに
 ・知名度が低い

大島紬とは

- 奄美大島を本場生産地とする絹織物で日本の民族衣装を代表する着物
- 島嶼の大会や成人式で着用
- 持ちがよいので親から子へ、子からその子へ何世代にもわたって着ることが出来る

泥の伝説



元々大島紬は、大島紬の産地である大島郡大島町に伝説がある。大島紬の産地である大島郡大島町に伝説がある。大島紬の産地である大島郡大島町に伝説がある。

～大島紬が出来るまで～

- ①布を織る
木綿糸で絹糸をきつく絞めていきます
- ②染め
- ③すりこみ
絹糸をほどいた絹に染料をすりこんで染色
- ④織る
③をほどき、柄に合わせて織り込む

まとめ

- 大島紬は高価なので小物にして手の届きやすい価格設定にする
- SNSで拡散する
- キャラクターにさせる
- ゆるキャラを作る

危機、奄美のシンボル

アマミノクロウサギとは

特徴

- 本土のウサギに比べ後ろ足が短い
- 子育て期の巣穴を持つ
- 耳が短い

絶滅の危機に瀕しており、国際赤い生体群に指定されている。生息数減少の理由としては、森林は減少し、マングローブの減少、マングローブなどの外来種による捕食などが生に挙げられている。

いきびん新聞

現在奄美の観光客は増加傾向にあるが、その一方で、観光客の増加に伴って、環境破壊や自然破壊などの問題が生じている。この問題を解決するために、いきびん新聞を発行し、観光客に奄美の自然や文化について伝えることにしている。

都市伝説

奄美大島には、アマミノクロウサギに関する都市伝説がいくつかある。その一つは、アマミノクロウサギが、かつては島中に生息していたが、現在は絶滅したという話だ。この話には、アマミノクロウサギの生態や、その減少の理由などが詳しく説明されている。



外編県と奄美諸島の年間観光客数 (2013年～2018年)



アマミノクロウサギ

ポスターセッションの様子 (大学内)



(9) 社 会 2016年(平成28年) 11月24日 木曜日 南 渡

大高北島商科大学
千葉と大

奄美の魅力掘り起こす

学生ら新シンボル提案

観光振興シンポ



観光振興シンポが、5つのテーマに絞ってプレゼンテーションが23日、奄美市青洲町の県立大ホールで開かれた。奄美の新たなシンボルを提案しようと、千葉商科大学と大高北島の学生グループが、11月22日、奄美市青洲町の県立大ホールで開かれた。奄美の魅力を掘り起こすシンボルを提案しようと、千葉商科大学と大高北島の学生グループが、11月22日、奄美市青洲町の県立大ホールで開かれた。

千葉商科大学国際教育センターの赤尾水海先生が、奄美の魅力掘り起こすシンポの趣意を説明した。奄美の魅力掘り起こすシンポは、奄美の魅力掘り起こすシンポを提案しようと、千葉商科大学と大高北島の学生グループが、11月22日、奄美市青洲町の県立大ホールで開かれた。

千葉商科大学国際教育センターの赤尾水海先生が、奄美の魅力掘り起こすシンポの趣意を説明した。奄美の魅力掘り起こすシンポは、奄美の魅力掘り起こすシンポを提案しようと、千葉商科大学と大高北島の学生グループが、11月22日、奄美市青洲町の県立大ホールで開かれた。

千葉商科大学国際教育センターの赤尾水海先生が、奄美の魅力掘り起こすシンポの趣意を説明した。奄美の魅力掘り起こすシンポは、奄美の魅力掘り起こすシンポを提案しようと、千葉商科大学と大高北島の学生グループが、11月22日、奄美市青洲町の県立大ホールで開かれた。

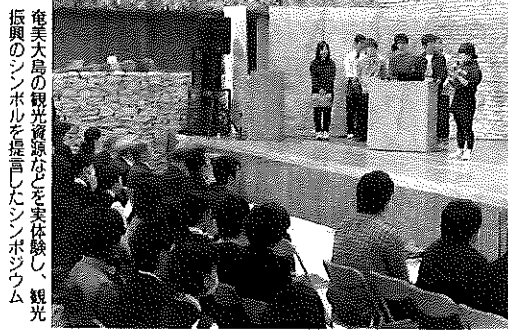
2016年(平成28年) 11月24日 木曜日

奄 美

大高北島商科大学
千葉と大

観光振興の可能性提言

奄美大島のシンボル発表



奄美大島で必修科目として、フィールドワークを行う千葉商科大学国際教育センターの赤尾水海先生が、奄美の魅力掘り起こすシンポの趣意を説明した。奄美の魅力掘り起こすシンポは、奄美の魅力掘り起こすシンポを提案しようと、千葉商科大学と大高北島の学生グループが、11月22日、奄美市青洲町の県立大ホールで開かれた。

奄美大島で必修科目として、フィールドワークを行う千葉商科大学国際教育センターの赤尾水海先生が、奄美の魅力掘り起こすシンポの趣意を説明した。奄美の魅力掘り起こすシンポは、奄美の魅力掘り起こすシンポを提案しようと、千葉商科大学と大高北島の学生グループが、11月22日、奄美市青洲町の県立大ホールで開かれた。

奄美大島で必修科目として、フィールドワークを行う千葉商科大学国際教育センターの赤尾水海先生が、奄美の魅力掘り起こすシンポの趣意を説明した。奄美の魅力掘り起こすシンポは、奄美の魅力掘り起こすシンポを提案しようと、千葉商科大学と大高北島の学生グループが、11月22日、奄美市青洲町の県立大ホールで開かれた。

奄美大島で必修科目として、フィールドワークを行う千葉商科大学国際教育センターの赤尾水海先生が、奄美の魅力掘り起こすシンポの趣意を説明した。奄美の魅力掘り起こすシンポは、奄美の魅力掘り起こすシンポを提案しようと、千葉商科大学と大高北島の学生グループが、11月22日、奄美市青洲町の県立大ホールで開かれた。

8. 7本取り組みの外部発信

[資料請求](#)[アクセスマップ](#)[本学で学びたい方へ](#)[在学生・保護者の方へ](#)[卒業生の方へ](#)[一般・社会人の方へ](#)[企業の方へ](#)[教職員の方へ](#)[大学概要](#)[強み](#)[学部・大学院](#)[社会・地域貢献](#)[国際人育成](#)[資格・就職](#)[HOME](#) [学部・大学院](#) [国際教養学部](#) [最新情報 2016年度](#) [【フィールドワークin奄美】奄美で観光振興シンポジウムを開催しました](#)

【フィールドワークin奄美】奄美で観光振興シンポジウムを開催しました

いいね！ 0

[ツイート](#)[LINEで送る](#)

2016年12月5日

国際教養学部

国際教養学部の1年生が11月21日(月)～23日(水)の日程で鹿児島県奄美大島を訪れ、フィールドワークを実施しました。ベトナムでの「海外フレッシュマンキャンプ」に続くこの国内フィールドワークは、独特の自然の中で育まれた文化が残る奄美で、日本をより深く理解するために行われました。

最終日の11月23日(水)には「フィールドワークin奄美」の集大成として観光振興シンポジウム「奄美のシンボルを探そう・つくろう」を開催し、奄美大島の観光振興策を提言しました。

奄美大島に到着後、学生たちは伝統工芸品として有名な大島紬の工房見学や染色体験、島唄の演奏と解説に耳を傾け、旧暦の8月に五穀豊穡と集落の繁栄を祈り捧げる「八月踊り」に込められた思いや背景などに理解を深めました。また、マングローブ原生林ではカヌーに乗って、島固有の植物や生物の多様性を自らの目で確認し、奄美の特異な自然も体感しました。



2日目は翌日のシンポジウムに向け、若い視点から見た観光振興策の提言を行うべく、鹿児島県立大島北高校の生徒とともにワークショップを行いました。事前講義で奄美の文化、歴史、自然などを学んだ学生たちは、班ごとに「奄美のシンボル」を設定し、地元の高校生の視点と本学学生の視点で意見を交わし、奄美大島の内側からみた文化資源と外からみた魅力を比較考察しました。

シンポジウムでは奄美市教育長をはじめ、観光協会、商工会など地元の文化、観光に関わる方々に向け、本学学生と高校生の合同チームで「ハートロック」「鶏飯」「赤尾木湾」「ルリカケス」「田中一村」をテーマにプレゼンテーションを行い、市長賞に「ハートロック」、奄美大島観光協会長賞に「ルリカケス」、審査員特別賞に「鶏飯」と「田中一村」を発表したグループが選ばれました。

シンポジウムの最後には大島北高校の森永あすかさんによる島唄が披露され、島の文化が若い世代に伝承されていることを知る機会にもなりました。



最新情報

[2016年度](#)[2015年度](#)[2014年度](#)

学部・大学院

学部

国際教養学部

[学部長からのメッセージ](#)[3つのポリシー](#)[カリキュラムと学修プロセス](#)[アクティブ・ラーニング](#)[資格取得支援プログラム](#)[学びのサポート](#)[進路・就職](#)[学部ピックアップ情報](#)

大学院

[千葉県私立大学短期大学間単位互換協定について](#)[早い・簡単・便利・同時出願で割引も!](#)[インターネット出願](#)
一般入試・大学入試センター試験利用入試[入試案内 \(学部\)](#)

資料請求

千葉商科大学 資料請求フォームはこちら

国際教養学部

[Find us on Facebook](#)

千葉商科大学

[Find us on Facebook](#)

真のグローバル人材になるためには、自らのidentityを見極め、世界と向き合う価値軸をしっかりと身につけている必要があります。入学直後、ベトナムでの「海外フレッシュマンキャンプ」で海外から日本を見つめた学生たちは今回、日本国内でも独自の生態系を持つ奄美の自然に育まれた歴史や文化に触れ、日本とは何かを考察するアクティブ・ラーニングとなりました。

現地での調査結果は各班でとりまとめ、ポスターセッションで発表する予定です。自ら行った調査を再確認すると同時に、他班が行った調査方法と結果を考察し、さらなる理解へとつなげます。



学生の声

奄美大島を初めて訪れ、自然の豊かさと千葉では見たことのない鳥を見かけ、生息する動物にも違いがあることに驚きました。また奄美で出会った方々から気さくに声をかけていただき、人々の温かさを感じました。今回の観光振興シンポジウムでは、奄美の固有種でもある「ルリカケス」をシンボルとしてプレゼンをまとめ、観光協会賞を受賞することができました。高校生はルリカケスを見たことがあり、私達ルリカケスを見つけることができなかったことから、ルリカケスを知らない島外の人々と、奄美の人々では、それを見た時に反応に違いがあるのではないかと思い、寸劇を交えたプレゼンを行うことにしました。班のメンバーがそれぞれ得意分野を生かしてプレゼンできたことが受賞に繋がったと思います。今回、奄美のシンボル探しに取り組み、奄美大島は青い海ばかりが印象に残りますが、自然すべてに見どころがありますので、ぜひ皆さんにも訪れてみて欲しいと思いました。

私の出身は青森で、地元にも特徴的な文化が有りますが、奄美の文化は、青森のものとは全く異なるものでした。初日の夜に八月踊りを体験し積極的に踊りに参加したところ、現地の方から「あなたも立派に現地人だ!」と言って頂き、奄美の方々との距離が一気に縮まった感じがしました。観光振興シンポジウムでは、潮の満ち引きで出現するという「ハートロック」をシンボルとしてプレゼンを行いました。高校生にハートロックについてヒアリングして、実際に現地の人々がハートロックについてどのように思っているか、生の声を集めることができました。結果、奄美市長賞を頂くことができ、まさか自分たちの班が受賞できるとは思ってなかったので、とても嬉しかったです。今回は2泊3日の日程で限られた場所しか訪れることができず、ハートロックの実物には出会えなかったため、また奄美大島を訪れ、ほかの良さにも触れてみたいと思います。

事業実施の状況（写真）

事業名：ワークショップ 奄美の魅力発見・発信

～地元高校生の誇りと首都圏大学生の驚きを組み合わせ新しい時代の観光振興策を提言～

1、ワークショップ（11月22日大島北高校生徒と奄美パークにて開催）



2、シンポジウム（11月23日ワークショップの成果発表を実施）



